

亜麻から 生まれたまち

～未来へつなぐ ふるさとの花～

北区では、明治23年から昭和32年まで、現在の麻生町で亜麻の茎を原料に繊維を採る工場が操業、地域を支える一大産業として栄えていました。

今月は、町名の由来となった「亜麻」の魅力を発信しながら、地域の亜麻文化の保存・継承に取り組む「あさぶ亜麻保存会」の活動を紹介します。

亜麻で地域をひとつに

「亜麻を通してまちを知ること、地域への愛着を深めてもらいたいですね」と語るのは『あさぶ亜麻保存会』の宮崎正晴^{みやざき しょうはる}会長。

麻生地区では、ゆかりのある亜麻を知ってもらおうと、住民らが亜麻の花でメーンストリートを飾り、有志で食や健康と結び付けたイベント「あさぶ亜麻そば祭り」を行ってきました。こうした活動を、まちを挙げてさらに進めていこうと、連合町内会や商店街が中心

となり、昨年6月、同会を立ち上げました。

同会の副会長を務める永倉吉裕^{ながくら よしひろ}麻生商店街振興組合理事長も「長らく有志で亜麻を守ってきました。地域全体に活動の輪が広がるのはうれしいですね」と笑顔で話します。

同会発足後に行われた亜麻植えに参加した住民からは「地域が歴史を大事にしなから一つになる、すばらしい活動ですね」との声が聞かれました。

「麻生の『礎』となった亜麻を未来に。課題もありますが、地域に根付かせたいです」と力を込める宮崎会長。

麻生のまちには、この夏も笑顔と一緒に薄青色の花があふれることでしょう。



笑顔で亜麻の種を植える保存会の会員



当時をしのぶアカマツ

隆盛を誇り、地域を支えていた亜麻産業も原料の高騰や化学繊維の台頭を受け、やがて幕を閉じます。

昭和32年、帝国製麻琴似製線工場が閉鎖。跡地の宅地化が決まると、工場ゆかりの「麻」を、まちの名として後世に残そうと、住民らが尽力、昭和34年4月「麻生町」が誕生しました。

麻生町3丁目には、当時の工場長宅に植えられていたアカマツが、今も道路の中央に残っています（写真）。

このアカマツは、地域のシンボルとして「北区歴史と文化の八十八選」にも選ばれ、今も麻生の発展を見守っています。

